

西日本正教

No.148

Summer, 2020

西日本主教教区宗務局

604-0965 京都市中京区柳馬場通二条上る六丁目 283

京都ハリストス正教会内

Email:

電話・FAX (075)231-2453

郵便振替 01030-5-18547



これから修復工事を迎える
豊橋ハリストス正教会 聖使徒マトフェイ聖堂（国指定重要文化財）

西日本主教教区 教区会議

六月二五日

六月二五日（木）、西日本主教教区「教区会議」が大阪正教会・生神女庇護聖堂会館ホールを会場に開催された。なお今回はコロナウイルス禍のため、六月一〇日に会計資料や活動報告等を各教会代議員に発送し、事前に資料内容を確認のうえ、返信ハガキに承認可否を〇印で記入いただき、欠席者には委任状の提出を依頼するという、初めての会議形式を採用した。

【司祭会議】

教区会議に先がけて、同日午前司祭会議、正午から会計監査が行われた。

司祭会議では前年度の振り返りと報告。さらに二一年新年度の教区活動計画案、各教会の活動計画案、情報交換が行われた。またインターネットを活用したウェブ会議開催案がゲオルギイ松島師から提案された。

ダニイル府主教座下の祝福により、司祭会議では、これらすべてを原案どおり本会議に上程することを決議。全国公会代議員と会計監査、教区推薦の総局役員も承認された。

【教区会議】

同日一三時より教区会議を開催。出席者は九人で、他は委任状提出のうえ欠席だった。残念ながら当日ご欠席されたダニイル府主教座下の祝福により、議長にパウエル及川宗務局長、副議長にゲオルギイ松島雄一師、書記にワシリイ杉村師を指名。役員のうちミハイル佐藤孝雄財務部長は欠席だった。

開会宣言の後、ダニイル座下の開会メッセージ、前年度の業務報告と新年度計画が及川局長、財務諮問委員会が松島師、諸規則検討委員会が杉村師、全国宣教企画委員会がグリゴリー伊藤師より、それぞれ報告された。

続いて前年度決算報告（教区センター含む）、監査報告、教区分担金案、コロナウイルス禍に対し教団から交付される災害交付金の各教会への配分案が審議され、すべて満場一致で承認された。

宣教活動は新型コロナウイルスの状況を鑑み、年内はほぼ休止、年明けから慎重に対応する予定。「西日本正教」の年二回発行のみ確定している。

さらに本年三月、教団主教会議あてに西日本教区司祭一同名で提出した請願書について、さらにお願いと提案を継続することを確認。内容は主に、ニコライ小野成信修道司祭（現ロシア正教会駐日ポドヴォリエ所属）の日本正教会へ

の正式な移籍・受け入れと、豊橋正教会への聖職者早期派遣の二つである。

最後に七月の全国公会代議員を選任し、十五時に閉会。聖堂で記念写真を撮影した。

長年教区財務部長を務められたミハイル佐藤孝雄兄、総局役員のパウエル小田島嘉一郎兄、ありがとうございます。

コロナウイルス禍の影響でこのような形式での教区会議となりましたことをお詫び申し上げます。また、会議開催にご尽力くださった大阪正教会の皆様感謝申し上げます。

（パウエル及川記）



【教区役員一覧】

（任期三年・監査一年 敬称略）

宗務局長	長司祭パウエル	及川 信	京都
教務部長	長司祭ゲオルギイ	松島雄一	大阪
庶務部長	司祭グリゴリー	水野 宏	人吉
財務部長	副輔祭サムイル	尾又慎一	神戸
会計監査	アルセニイ	三井治郎	豊橋
会計監査（新任）	ペトル	山岡照明	大阪
総局役員（推薦）	イアコフ	満田 稔	豊橋

全国公会 東京にて開催

【公会第一日】七月二一日（土）

東京復活大聖堂教会・ニコライ会館において、一三時半開会祈祷、ダニイル府主教座下の開会宣言により二〇年度全国公会を開始。代議員定数六四名中、出席三二名、委任欠席二〇名。議長ダニイル座下の指名で、副議長・書記・議事録署名人・議事運営委員を選任。府主教座下の訓示、宗務総局教団活動報告（一関・小池師）に続き、財務諮問委員会（松島師）、全国宣教企画委員会（伊藤師）、諸規則検討委員会（山手・柘田師）の各委員会報告。令和二年七月豪雨（九州豪雨）災害について人吉正教会のグリゴリイ水野師より報告。その後、一八時より大聖堂で徹夜祷が執り行われた。



【公会第二日】七月二二日（日）



午前中、ダニイル府主教座下、セラフイム大主教座下、三教区宗務局長らの陪祷する主日聖体礼儀において、コンスタンティン柘田尚師（山手）の長司祭昇叙祝福。説教は柘田師。信徒領聖後、永眠教役者記憶リテイヤを執行。

昼食後、一三時半より二日目の議事開始。前年度決算報告（小島財務部長）、監査報告と予算案上程が行われ、満場一致で承認。今年度会計監査の選任などの議事後、豊橋・横浜両教会から早期の常任司祭派遣の要請。セラフイム座下のご訓示により閉会。大聖堂で閉会祈祷と記念撮影が行われた。遠く西日本から出席された皆様、猛暑の中、ありがとうございます。 （パウエル及川記）

教団人事（八月一日付）

新任

宗務総局長 長司祭マルコ小池祐幸師 一関
総局役員 アイアコフ満田 稔兄 豊橋

退任

総局役員 パウエル小田島嘉一郎兄 名古屋

昇叙

長司祭 コンスタンティン柘田 尚師 山手
飾十字架・パリツァ佩用祝福



特集 コロナ禍の教会から

教会の感染拡大防止対策の福音的基盤

今年の一月から顕在化した新型コロナウイルスは、今や世界的に感染が拡大し、人々のさまざまな社会活動に影響を与えています。

教団は二月二六日付の通達で、各管轄司祭に「政府・厚生労働省が発表する対策の基本方針を参照」のうえ、教会単位で対策を講じるよう指示しました。そして具体例として「体調不良者の参拝自粛」「入堂時の手の消毒」「参拝時のマスク着用」を挙げています。

その後、国内での感染拡大が大斎や復活祭期と重なるなどしたため、どの教会もさらなる対策を迫られています。

ここでは、教区の中で独自に厳密な対策を行っている大阪教会の事例をご紹介します。

(編集部)

どんな時でも優先されるべき、私たちクリスチャンの判断基準、それは愛です。

主「ご自身が「一番大切な誠め」として「全力を尽くして神を愛せよ」、さらに「これと同じ」こととして「あなたの隣人を愛せよ」と教えます。そして「人がその友のために自分を捨てる、

これよりも大きな愛はない」と言い、ご自身を身をもってその真実を生き抜きました。

ハリストスの復活が喜びなのは、それが私たちの復活でもあるからです。パスハのトロパリは「…墓にある者に生命を賜えり」と歌います。「墓にある者」とは死んだようにしか生きられなかった私たち自身のことです。

私たちが「復活のいのち」を生きたら「愛を生きた」ということ、「私たちが死から甦らされた」とは、愛せない生き方から愛せる生き方へと回復されたことです。

今、この「コロナ禍」にあつて、この「愛であるいのち」を生きたチャンスが与えられました。多くの聖人たちが困難な事態を前に「友のために自分の生命を捨て」ました。彼らにとって、それぞれの困難な事態は「愛を生きた」チャンスでした。私たちにも今「自分を死ぬ」「自分を捨てる」ことで愛を生きたチャンスが与えられています。

私たち正教徒は素晴らしい礼拝の伝統とその喜びを恵まれています。それを一時断念するという辛い選択を今、世界中の主教たちまた信仰の仲間たちが「愛を生きた」として選択しています。それは「自分の宗教的満足」を求めて生きる生き方を死んで、神が何よりも私たちに望み、ハリストスが私たちに取り戻してくれた生き方、すなわち「愛を生きた」ためです。

私たちが教会の本質である「集まり」から遠ざかっているのは「自分を守るため」ではありません。感染が次の感染に、さらに次の感染へと連鎖し、遠くの隣人たちに苦しみと死をもたらす…だから、光あふれ喜びに沸き返るあの復活祭を断念しました。主日ごとの聖体礼儀とそこでの領聖をあきらめました。

そもそも…復活祭の喜びは何のためでしょう。ハリストスによって私たち「墓にある者」に回復された「愛を生きた」いのちを、どんな困難な状況下でも勇氣と忍耐をもって貫くためです。貫けるようになるためです。「領聖」はハリストスの復活の分かち合いであるとともに、ハリストスご自身の「友のための死」、3 そう十字架と死の分かち合いです。その体験の積み重ねが、いま教会の目に見える集いから引き離された、でもそのつらさを隣人たちへの愛の実践として引き受けてゆく私たちに「いつまでも絶えることのない」(コリンフ前二一章)愛の、静かな喜びを与えてくれるのです。

(「浪華正教六七月号」より)

政府の緊急事態宣言解除にともない、大阪教会は参拝自粛のお願いをひとまず終了しましたが、なお「おそろおそろ」の再開を模索する時期と位置付けました。しかし、しばらくは月

二回程度の参拝、あるいは「コロナ前の半分くらいの参拝回数」を目安として信徒に示します。あわせて、次のような感染防止対策を実施しています。

一、信徒へのお願い

- 体調不良の際の参拝自粛。
- マスク着用。
- 聖堂に入る前の手洗い、手指の消毒。
- 聖堂で互いの距離を二メートル確保。
- 握手、ハグ等の身体接触、私語を避ける。
- 換気のため窓や扉を開放。エアコンが十分効かないため服装その他で暑さ対策。
- (水分は各自で用意し補給)
- 接吻しない。(アイコン、十字架、福音書、聖爵、司祭の手など)
- 祈祷後の速やかな解散。
- 痛悔機密で伏拝しない。(伏拝すると手が床につくため)

二、教会の対策

- 受付での参拝者カードへの記載。(感染者が万一出た場合のため)
- 聖体礼儀後の昼食中止(コロナ終息まで)
- 各種行事・会合の延期または中止。
- 聖堂の立ち位置の目印。(特に領聖の行列が密にならないよう、養生テープで)

- 聖パン記憶は記憶用紙のみを提出。至聖所に聖パンを用意、記憶用紙とともにポリ袋に入れて返却。聖パンの奉仕者は使い捨てゴム手袋を着用。司祭も頻繁に手指の消毒。記憶用紙記入の筆記具の消毒。
- 月例パニヒダでの糖飯自粛。
- 聖堂内の換気として、聖堂の入口と南北の扉、窓、至聖所南北門を開放。
- 互いの間隔を十分確保するには三〇人程度しか入れないので、参拝者が多い場合は二階バルコニーへ誘導。

三、奉神礼への対処

- 夏場の暑さ対策で、聖体礼儀開始時刻を一時早め九時からに。
- 痛悔機密はビニールシールド越しに話す。司祭はフェイスシールドを着用。
- 信徒領聖は使い捨ての木製スプーンと、赤布の代わりにペーパーナプキンを使用。祈祷後に焼却し、灰を不敬度にならない場所に埋める。ロすすぎのパンは係が各自にトングで渡す。葡萄酒は各自、使い捨てプラカップで飲む。
- 神品領聖では聖爵に口をつけないよう、聖血を柄杓でカップに注いで受ける。
- 信経、天主経は会衆が唱和するところ、輔祭がマイクを使用し一人で唱える。

- 聖歌はその日の参拝者のうち四―五名で歌い、他の者は小さな声で歌うにとどめる。聖歌の譜面台は互いに前後左右二メートル前後離し、エアロゾル飛沫防止のためビニールシールドを設ける。
- 十字架接吻に代えて十字架での祝福。

四、コロナがもたらした新しい試み

転んでもただでは起きません

- 聖体礼儀と説教をLINE、フェイスブックでオンライン中継。ユーチューブにアップ。会議ソフトZoomによるオンライン伝道会を八月から月二回開催。
- メール通信「豊津だより」を開始。教会関連の出来事や次の聖体礼儀の聖書の読みの解説、聖師父たちの言葉の紹介などを、週二回ほど司祭から配信。
- 廻家祈祷に代えて高齢信者へ「廻家電話」
- 婦人会の奉仕でマスク六百枚制作、配布。
- 女性信徒の協力で、暑さ対策として輔祭・堂役のステハリを薄い生地で新調。
- 参拝者減少のため、献金振込用紙を会報に同封し、利用を呼びかけ。

(ゲオルギイ松島記)



九州豪雨災害について

去る七月四日（土）、記録的豪雨（令和二年七月豪雨）のため、熊本県を中心に大規模な水害が発生しました。その結果、教会のある人吉市周辺の市民生活に大きな影響が生じ、信徒も被災しました。教区の皆様におかれましては、この状況をご理解いただき、温かいご支援を賜りたく、何とぞよろしくお願い申し上げます。

なお当教区報では紙数の都合上、要点のみを掲載しました。より詳しくは「正教時報」九月号に掲載しますので参照願います。

災害の概要

二〇二〇年七月三日（金）夜から四日（土）朝にかけて、熊本県南部の球磨地方で観測史上最大の二四時間雨量四〇〇ミリ超の豪雨が降った。四日午前六時頃から人吉市、球磨村、八代市などの複数個所で球磨川が氾濫。川辺川など、球磨川水系の中小河川も同じく氾濫した。

人吉市内では球磨川に沿って、南北にそれぞれ数百メートルの幅で市街地が浸水。ひどい場所では建物の二階まで水没した。死者・行方不明者は熊本県内だけで六七人にのぼっている。

ライフラインは、浸水を免れた地域では大きな問題はなかったが、通信関係は四日朝から七

日夜まで、NTTの固定電話とインターネット回線が不通。郵便配達も二八日まで停止した。

人吉市では全世帯の約三分の一が被災。避難所生活者は七月末時点で数百人だが、損壊した自宅に留まって生活している人が多く、市民生活の困窮は今もなお甚大である。

教会・信徒の安否確認と被災状況

司祭館として借りている家屋は河川や崖から離れており、全く被害はなかった。

四日夕刻、人吉教会の状況を確認。道路は冠水したが、聖堂は高い位置にあるため無事。

続いて人吉市内の信徒四軒を安否確認訪問。市中心部に近い一軒だけ、玄関に水が浸入したが、その他の世帯は全て無事を確認。

翌五日（日）、相良村で信徒の安否を確認。イオナ緒方俊一郎執事長が運営する老人施設一棟が床上浸水で居住不能。家族や施設入居者は無事。同じ地区のイオアン緒方裕之兄は自宅と車、運営する「なつめ保育園」（下の写真）が床上浸水で全て使用不能。家族九人は全員無事で、人吉市内の親戚宅で避難生活中。

その後、雨の中心は九州北部に移り、筑後川流域などで被害が発生したが、電話復旧後の八日までに、九州管内では他に信徒の被害はなかったことを確認し、現在に至る。

（グリゴリー水野記）

九州豪雨災害支援金のお願い

郵便振替 01750-8-169661

名 義 人吉ハリストス正教会

- 振替用紙の通信欄に「支援金」とご記入ください。
- 恐縮ですが、振替手数料は各自でご負担ください。



聖なる光（光の神学）

サーロフの聖セラフイム

長司祭。パウエル 及川 信

元始に神、天地を造れり。地は形なく虚しくして暗は淵の面に在り、神の神（しん）、水の面に覆育（ふいく）せり。神曰えり、光あるべし。すなわち光成れり。神光を觀て善とせり。神光を暗より判てり。神光を昼と名づけ、暗を夜と名づけたり。夕あり、朝あり、これ一日なり。（創世記一章 正教会訳）

ロシアの聖人サーロフの聖セラフイムは、年二回記憶日（記念日）があります。一月一日と八月一日です。一九〇三年八月一日に聖人の列に加えられた聖セラフイムの列聖百年祭が二〇〇三年、サーロフおよびディヴェエヴォで挙行されました。セラフイム大主教座下、イオアン長屋師と共にその記念祭に参拝できたことは、信仰生活の佳き思い出としてわが胸の内息づいています。

その記念祭はとにかく暑かった。盛夏の眩しい陽ざしが祭服の奥まで射し込み、汗も枯れ果てました。でも真夏の熱い光を感じる時、いつも聖セラフイムを思い浮かべます。まさに彼は熱の聖人、光の聖人といえます。光、それはま

さに創世の光、命の源、宇宙の根源、聖神の温熱のあらわれ、希望の源泉でもあります。聖セラフイムの体現した光にわたしたちは注目しましょう。

救主降誕は光にはじまる

すべての人々が寝静まる真夜中、深い静寂の中であなただけが目覚めており、万物の主宰に願いを献げることを考えなさい。たしかに寝りは甘いが、祈りよりも甘いものはなく、光り輝くものはない。（聖金口イオアン）

正教会（オソドックス・チャーチ）の救主イイススの降誕の聖像（イコン）は暗闇に浮かび上がるかのように、馬槽の幼子イイススに光が照射されています。創世記は「夕あり」と明言します。実に正教会の一日は夕暮れ時、朝を待つ時から一日が始まります。

わたしたちは、暗闇の一隅を照らす光から全ての救いと創造の神の御業（みわざ）が始まることを忘れてはいけません。

シリアの聖イサクは、来るべき世界の言葉が充滿する神の沈黙・静寂があるといっています。信仰者は幼子のように神の懷に抱かれ、沈黙と静寂から祈りを、そして信仰生活をスタートするのです。

主の降誕祭を祝い、祈るすべての被造物は、光を自覚します。救主がお生まれになった馬小屋を照らす光は、復活を預象します。

藉身（せきしん、受肉）はあらゆる被造物、人を救いへと導きます。なぜなら赤ちゃんがこの世に生を受け、生まれてきた時、目にするのは神の光だからです。

聖神の光の充滿

聖にして福たる常生なる天の父の聖なる光栄の穏やかなる光イイスス・ハリストスや、我等日の入りに至り晩の光を見て、神・父と子と聖神を歌う、生命を賜う神の子や、なんじは6何時も敬虔の声にて歌わるべし、ゆえに世界はなんじを崇め讃む。（大晩課式・聖人の讃頌）

日本正教会では聖霊を聖神と訳しています。タボル山（もしくはヘルモン山）でイイススが変容の光に顕栄され、来るべき復活を預象した時、救主は神秘の光に満たされました。

四世紀の聖人、克肖なる聖大ワシリイ（バシレイオス）は、聖神の光についてこう語っています。

「御霊を内に持つ魂は、御霊に照らされて、それ自身靈的なものになり、他の人々に恵みを溢れさせる。そこから、来るべきことの見え

奥義の理解、隠されたものの把握、賜物の分与、天の市民権、天使と歌うこと、終わりなき喜び、神の内にとどまること、神に似ること、そして究極の望みであるところの神になることが生じる」(山村敬訳『聖大バシレイオスの聖霊論』南窓社)

神成(テオシス)とは、まさに神であり人であるイイススの人生を歩み、死より復活し、人が永遠の生命を賜わることを意味します。

モーセがシナイ山で神と対面し、光り輝く者となったように、信仰者は「霊(聖神)の照明の中でなければ、見えざる神の似像を見ることができない」と聖ワシリイは語ります。

新神学者聖シメオンは、さらにこう述べています。

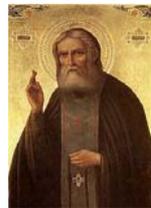
「私はあなたの愛と美とを楽しみ、至福と聖なる甘味に満たされている。光と光栄の中に私は参加している。顔は私が『愛している方』の顔のように輝いて、そして全身は明るくなる。そのとき私はこの世で美しいと言われる者たちより美しくなり、富める者たちより富む者となり、強者より強くなり、皇帝たちよりも偉大になり、天上と地上のいかなるものよりも名譽ある者となる。なぜなら、あなた(神)の光の中に沈んでいる私の理性(ヌース)は照らされ、あなたの光栄と同じような光になる」

(修道士テオクリトス・ディオニシアトス著、司祭イオアンニス長屋房夫訳『天と地の間 アトスの修道』オーロラ出版)

光の信仰は人には計り知れない、銀河系を永遠に巡る、流れ星の光彩のように受け継がれ、聖グリゴリイ・パラマスや聖山アトスの多くの修道者が光の中に折り、復活を体験しているのです。

近代ロシアの聖人サーロフの聖セラフイムもそのひとりです。

聖セラフイムの光の信仰



弟子モトフィロフとの「対話」の中で、セラフイムは「思慮深いおとめ(処女)と思慮の浅いおとめのたとえ話」(マタイ福音書二五章)を語ります。聖人は、思慮の浅いおとめたちが切らした神秘の灯火の油は、善行ではないと断言します。すなわち聖神の獲得、聖神の充満がなかったためだと。

すでに証聖者マクシモスがこう叙述していることを忘れてはなりません。

「すべての霊的賜物は、油のように間断なく思惟に燃料を注ぎ込むような習性を、それぞれに対応するものとして用いるからである。それは、霊的賜物がそれを受容する人の習性によって存続し続けるためである」(同前「第六」)

聖セラフイムは不思議な光に包まれ、凍てつく雪原の中にあつて、暖かささえも体感させ、モトフィロフを心底、感動させました。

「これらの話のあと、わたしは彼を見ました。激しい敬虔な畏れが全身を貫きました。太陽の中心のような、真昼の強烈な光を放つ人の顔を想像してください。あなたは、彼の唇の動きや眼光の変化を見たり、彼の声を聴いたり、あなたの肩に手をかけている人を感じるでしょう。いやあなたは、未だに彼の手を感じないし、あなた自身も彼の姿さえも見えません。そればかりではなく、目もくらむまばゆい光が四方に広がり、森の空き地を包む景色と、わたしと師父とに降りかかる粉雪を明るく輝きで照らし出す光景しか見えません。その時のわたしの状態をあなたは想像できるでしょうか。

『いまどんな感じですか』と、師父セラフイムはわたしに聞きました。

『とてもいい気持ちです』と、わたしは答えました。

『どんなふうに。どういい気持ちなのですか』わたしは答えました。『靈魂のうちに穏やかな静けさと平安を感じます。とても言葉では言い表せません』(及川信『ロシア正教会と聖セラフイム』より「対話」サンパウロ)

「来るべき世」ではなく、すでに神の国が実現しつつあることが、わたしたちの目の前に表信されています。

いつの日にか、という遠い未来の予測ではなく、いままさに、ここに、復活の光が到来し、「父と子と聖神の国」が「いまも何時も世々に」実在しています。

光の信仰があつてこそ、救いと復活があります。そしてこの信仰体験は、正教会の聖堂や信仰生活にも満ち満ちているのです。

奉神礼的生活 すべて光の中へ

聖堂ばかりでなく家庭祭壇にもランプやロウソクが灯されます。できる限りの聖像（アイコン）、十字架などの一つひとつが光に照らされます。ほのかに照らされるアイコンの柔らかな光に満ちた眼差しは、わたしたちを新たな創造へ、神の国へと導きます。

それは信仰者一人ひとりが神のアイコンであり、復活の光に満たされた光照者だからです。正教会の灯火は単なる光の照明ではありません。

信仰者の歩みを照らす十字架の道行きの光、神と一体となるための婚礼の華燭の典、神言の解明の光、神の愛の熱線、一人ひとり

の信仰者を乗せた方舟を導く灯台の希望の光です

埋葬式も復活の祝祭の一つです。神の国への凱旋、永遠の生命の獲得を証するため、聖堂は灯火の光に満たされ、司祭服は復活をイメージする白色や金色が使用されます。

天地創造の「夕あり」に続き、光り輝く「朝あり」の創造の時の到来、光あふれる奉神礼的信仰生活が祈念されるのです。

それは聖なる黄金の鎖、地上から天上へと向かう光の登山、喜びと満足、聖神の喜悅と感動あふれる天国への光の階段なのです。

司祭は金ロイオアンの聖体礼儀でこう祈ります。

「信の温熱は聖神をもって充滿す。アミン」

聖神の光と共に、神の光の中へ、私たちは復活への歩みを続けます。それゆえ光の光である復活大祭直前の受難週、聖土曜日（聖土曜日）の領聖詞は、復活の光栄の到来を力強く宣言するのです。

「主は寝ぬる者の覚むるがごとく興き、われらを救う者は復活せり、アリルイヤ」

（「受難週間奉事式」）



永遠の記憶

首司祭イウスチン山口義人師

四月一五日に八六歳でご永眠されました。埋葬式は一八日、ニコライ堂でセラフイム大主教座下の司禱で行われました。九一年から二〇〇一年まで大阪教会を管轄されました。（写真は大阪教会管轄当時）



副輔祭アレクサンドル松田剛兄

五月一四日に五一歳でご永眠されました。埋葬式は一七日、大阪教会で行われました。大阪教会で副輔祭としてご奉仕され、打鐘も務められました。（写真は昨年（昨年）の復活祭）



豊橋正教会 聖堂修復工事へ

教団に融資の申込み

国指定重要文化財である豊橋ハリストス正教会・聖使徒マトフェイ聖堂は老朽化にともない、全面的な修復と耐震補強の調査工事が必要となった。総工費は約二億円と見積もられ、その資金確保のため教団に融資の申込みを行った。三月十九日、東京での総局会議でこの申込みを承認。五月に正式に書類を整えて融資を申請することになった。

臨時信徒総会

四月二十九日（水祝）、復活大祭聖体礼儀後、臨時信徒総会と責任役員会を信徒会館で開催、教団への申請書を承認した。

申請書類の提出

五月一三日の教団総局会議・責任役員会に、臨時信徒総会・豊橋教会責任役員会の議事録等し等の資料を添え、正式に教団に融資を申請、無事承認された。融資は無利子で総工費の約一割の一八〇〇万円。工事終了後毎年百万円ずつ、一八年間で返済予定。この内容は全国公会で提示される教団予算案に反映された。

文化庁 村上技官らの査察

六月二十九日（月）午前、文化庁の村上玲奈文部科学技官、愛知県文化局文化財部文化財室の浅岡宏司主査、豊橋市美術館の小林久彦館長、豊橋市文化財センターの岩原剛氏と鶴田知大氏、名古屋大学の西澤泰彦教授、文化財建造物保存協会（文建協）大阪事業部の加藤修治氏、遠藤優氏、坂井禎介氏らが査察。豊橋教会側は代表委員の及川信神父、満田稔執事長、三井治郎會計執事、三井新太郎執事、伊藤英一執事が出席。村上技官によれば、重文の保守修理事業開始にあたり、以下の項目が査察の目的である。

- ① 現状の把握
 - ② 二年前から文建協で行われてきた調査内容、時系列の工期ならびに経費等の確認
 - ③ 工事日程の確認と承認
- 修理委員会や専門家を加えた専門委員会の設置などを協議後、聖堂内外の視察も行われ、充実した内容だった。



打合せ・協議

七月一日（金）午前、文建協の人事異動をふまえ、文建協の北脇氏、遠藤氏、文化財センターの岩原氏、鶴田氏と、教会側から及川神父、満田執事長、三井治郎執事、三井新太郎執事、伊藤執事とで協議を行った。

現場監督が常駐する作業小屋、古材の保管倉庫、工事関係者の駐車場等は聖堂北側駐車場に設置を計画。聖堂周囲の植栽や南側駐車場の整備など、協議事項は多岐にのぼった。



これら一連の会議と活動はコロナウイルス禍の中、粛々と進められ、豊橋教会信徒の熱意と文化庁や県市関係者の皆様のご尽力には頭の下がる思いであり、本当に驚きと感謝の念でいっぱいです。また会合のたびに接待してくださる豊橋教会婦人会の皆様にも御礼と感謝を申し上げます。これからますます大変ですが、一丸となって頑張りましょう。（及川神父記）

教会ニュース

コロナ禍の制約の中で行われた、各教会での復活祭をご紹介します。

大阪教会・広島教会

四月十九日、参拝自粛期間であったため、SNSを使ってライブ中継。当初あきらめていた深夜の復活祭も、司祭夫妻で夜半課から早課を中継しました。(写真)同時的には四〇〇人以上の視聴がありました。

広島教会の復活祭は、残念ながら会場が市の施設で、コロナ対策上閉鎖されていて、開催中止になりました。



名古屋教会・半田教会

名古屋教会の復活祭は毎年、前日深夜から行われますが、今年は四月十九日午前九時半より神父と聖歌指揮者の二人で聖体礼儀を行いました。信徒の皆様には

予約していたクリーチの受け渡しのみ行いました。



半田教会の復活祭は四月二六日に神父とマトシカのみで聖体礼儀を行いました。

人吉教会・九州管区

人吉球磨地方では四月時点で(さらに現在に至るまで)コロナ感染者がいまぜんので、人吉教会では通常の日程である四月一九日午前一〇時より復活祭の聖体礼儀を行いました。

ただし参拝は執事のみにとどめ、祈禱後の会食は取り止めました。また信徒領聖の自粛を勧奨し、成聖したイースターエッグとクリーチを神父からのプレゼントとして配布するのみとしました。

巡回教会につ

いては緊急事態宣言が解除されるまで延期することとし、鹿児島教会は五月一七日、熊本教会は五月三十一日に復活祭の聖体礼儀を行いました。運営については人吉教会と同じ取扱いとしました。



福岡伝道所については、復活祭の日程を延期したものの、緊急事態宣言の延長対象地域に指定されたため、やむなく巡回自体を中止しました。

編集部注

コロナ禍の影響で予定されていた教区行事「奉神礼基礎講座」(三月二〇日・大阪)と「春のコンサート」(五月六日・京都)は中止になりました。

今後の教区行事(教区協賛を含む)も全て中止または開催未定となっています。一日も早いコロナ禍の終息を願いつつ、教区一丸となって歩んで参りましょう。